

2026年6月3日
(電子提供措置の開始日 2026年6月2日)

株主各位

那覇市久茂地2丁目9番12号
株式会社 沖縄海邦銀行
代表取締役 新城 一史
頭 取

第79期定時株主総会招集ご通知

拝啓、平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、当行第79期（2025年4月1日から2026年3月31日まで）定時株主総会を下記のとおり開催いたしますので、ご通知申し上げます。

本株主総会の招集に際しては電子提供措置をとっており、インターネット上の下記ウェブサイト「第79期定時株主総会招集ご通知」として電子提供措置事項を掲載しております。

当行ウェブサイト <https://www.kaiho-bank.co.jp/corporate/>



なお、当日ご出席されない場合には、書面によって議決権を行使することができますので、お手数ながら（電子提供措置事項に記載の）株主総会参考書類をご検討の上、同封の議決権行使書用紙に議案に対する賛否をご表示いただき、2026年6月23日（火曜日）午後5時までに到着するようご返送くださいますようお願い申し上げます。

敬 具

記

1. 日 時 2026年6月24日（水曜日）午前10時
2. 場 所 那覇市おもろまち2丁目14番1号
ザ・ナハテラス 3階 宴会場アダン
3. 目的事項
報 告 事 項
 1. 第79期（2025年4月1日から2026年3月31日まで）
事業報告および計算書類報告の件
 2. 第79期（2025年4月1日から2026年3月31日まで）
連結計算書類ならびに会計監査人および監査役会の
連結計算書類監査結果報告の件

決 議 事 項

- 第1号議案 剰余金の処分の件
- 第2号議案 取締役7名選任の件
- 第3号議案 補欠監査役2名選任の件
- 第4号議案 退任取締役に対し退職慰労金贈呈の件

以 上

※ 総会会場ご案内図を末尾に掲載しておりますのでご参照ください。

-
- ◎当日ご出席の際は、お手数ながら同封の議決権行使書用紙を会場受付にご提出くださいますようお願い申し上げます。
 - ◎議決権行使書面において、議案に賛否の表示がない場合は、賛成の意思表示をされたものとして取り扱わせていただきます。
 - ◎電子提供措置事項に修正が生じた場合は、掲載している当行ウェブサイトに変更内容を掲載させていただきます。
 - ◎ご来場の株主様へのお土産につきましては、ご来場いただけない株主様との公平性等の観点から取り止めさせていただいております。何卒ご理解くださいますようお願い申し上げます。

第79期（2025年4月1日から 2026年3月31日まで）事業報告

1. 当行の現況に関する事項

(1) 事業の経過及び成果等

【主要な事業内容】

当行は、預金業務および貸出業務を中心に内国為替業務、有価証券投資業務、代理業務、保険商品の窓口販売などを行っております。

【経済環境】

2025年度の国内景気は、雇用・所得環境の改善、政府の経済対策、緩和的な金融環境を背景に、総じて緩やかな回復基調で推移しました。年度末にかけては、個人消費に持ち直しの動きがみられ、設備投資も緩やかに持ち直した一方、輸出および生産はおおむね横ばい圏内で推移しました。先行きについては、海外経済の動向、各国の通商政策、地政学情勢や金融・為替市場の変動などが景気に与える影響を引き続き注視する必要があります。

県内景気においても、観光需要の拡大を背景に、個人消費が緩やかに増加し、設備投資及び住宅投資も持ち直すなど、全体として拡大基調で推移しました。また、公共投資・公共事業も高めの水準を維持しており、雇用・所得情勢についても緩やかな改善が続いた一方で、中東情勢の影響による原油価格の上昇など、県内景気の先行き不透明感が強まりました。

昨年に続く、日本銀行の政策金利引き上げ実施により、全国の金融機関で預金・貸出金利の引き上げが実施される中、当行においても預金・貸出金利の引き上げを実施した事を踏まえ、更なる金融仲介機能の拡充により地域を支える銀行としての役割が求められています。

【事業の経過及び成果】

このような環境の下、当行は第18次中期経営計画の初年度の取組みとして、事業者へのコンサルティング強化や個人顧客へのライフプランコンサルティング充実などに取り組んでまいりました。

その結果、当期の経営成績は次のとおりとなりました。

<預金>

預金は、個人預金や法人預金、地方公共団体向け預金ともに増加したことにより、前年度末比492億57百万円増加の7,674億96百万円となりました。

<貸出金>

貸出金は、地方公共団体向け貸出は減少しましたが、事業性貸出や個人向け貸出が増加したことにより、前年度末比170億55百万円増加の5,823億72百万円となりました。

<有価証券>

有価証券は、債券が減少したことにより、前年度末比209億98百万円減少の1,098億15百万円となりました。

<損益>

経常収益は、資金運用収益やその他業務収益が増加したことなどにより、前年度比28億45百万円増加の159億36百万円となりました。

経常費用は、資金調達費用や国債等債券売却損が増加したことなどにより、前年度比17億73百万円増加の137億94百万円となりました。その結果、経常利益は前年度比10億71百万円増加の21億41百万円となりました。

当期純利益は、前年度比9億50百万円増加の16億89百万円となりました。

【当行が対処すべき課題】

金融機関を取り巻く環境は、国内外の経済・市場動向に不確実性を残すものの、県内では観光需要や個人消費を背景に底堅く推移することが見込まれます。一方で、金利環境の変化や市場変動、人口減少を背景とした収益環境の変化等に対処する必要があります。

このような環境のなか、当行は第18次中期経営計画「BEYOND THE BANK」の基本方針である「デジタルとリアルのコミュニケーション」のもと、事業者向け本業支援や個人向け資産形成支援などコンサルティング機能の強化、アプリ機能の強化や多様なチャネル整備による利便性向上、人的資本経営の強化に取り組んでまいります。さらに、金利のある世界への転換を踏まえ、金融仲介機能およびコンサルティング機能を一層発揮し、収益力の向上と地域経済の発展への貢献の両立を図り、「お客さまのお役に立てる一番身近な銀行」の実現に取り組んでまいります。

(2) 財産及び損益の状況

(単位：百万円)

	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
預 金	738,323	733,801	718,239	767,496
定期性預金	185,738	172,288	168,114	177,933
その他	552,585	561,512	550,124	589,562
貸 出 金	549,558	548,519	565,317	582,372
個人向け	74,230	72,814	75,880	79,603
中小企業向け	419,688	418,961	431,934	453,983
その他	55,639	56,743	57,501	48,786
商品有価証券	—	—	—	—
有 価 証 券	180,619	168,937	130,814	109,815
国 債	78,147	65,020	48,359	39,934
その他	102,472	103,917	82,454	69,881
総 資 産	824,058	788,087	767,459	820,289
内 国 為 替 取 扱 高	3,099,593	2,837,819	2,674,003	2,944,720
外 国 為 替 取 扱 高	百万ドル 29	百万ドル 1	百万ドル 1	百万ドル 1
経 常 利 益	2,160	2,028	1,070	2,141
当 期 純 利 益	1,837	1,299	739	1,689
1 株 当 たり 当 期 純 利 益	円 銭 541.84	円 銭 383.15	円 銭 217.98	円 銭 498.20

- (注) 1. 記載金額は、単位未満を切り捨てて表示しております。
 2. 1株当たり当期純利益は、当期純利益を期中の平均発行済株式数（自己株式を控除した株式数）で除して算出しております。

(3) 使用人の状況

	当 年 度 末
使 用 人 数	613人
平 均 年 齢	40年2月
平 均 勤 続 年 数	16年3月
平 均 給 与 月 額	355千円

- (注) 1. 平均年齢、平均勤続年数、平均給与月額は、それぞれ単位未満を切り捨てて表示しております。
2. 使用人数には、臨時雇員及び嘱託（124人）を含んでおりません。
3. 平均給与月額は、賞与を除く3月中の平均給与月額であります。

(4) 営業所等の状況

イ 営業所数

	当 年 度 末
那 覇 地 区	店 15 うち出張所 (2)
南 部 地 区	8 (-)
中 部 地 区	21 (-)
北 部 地 区	4 (-)
離 島 地 区	2 (-)
合 計	50 (2)

- (注) 1. 上記には店舗内店舗方式の店舗（出張所含む）が13カ店（うち出張所1カ店）含まれております。
2. 上記のほか、当年度末において店舗外現金自動設備を33カ所設置しております。

- 当年度新設営業所
該当ございません。

(注) 当年度において店舗外現金自動設備を「那覇空港ビルディング」の1カ所廃止いたしました。

- ハ 銀行代理業者の一覧
該当ございません。

- ニ 銀行が営む銀行代理業等の状況
該当ございません。

(5) 設備投資の状況

イ 設備投資の総額

(単位：百万円)

設備投資の総額	276
---------	-----

ロ 重要な設備の新設等

(単位：百万円)

内 容	金 額
営業店設備等	99
事務機器等	86
ソフトウェア	89

(6) 重要な親会社及び子会社等の状況

イ 親会社の状況

該当ございません。

ロ 子会社等の状況

会 社 名	所 在 地	主要業務内容	資本金	当行が有する 子会社等の 議決権比率	その他
株式会社 海邦総研	那覇市壺川 3丁目1番19号	コンサルティング業務	100	80.00	—

(注) 上記に掲げた子会社1社を、連結対象子会社としております。

重要な業務提携の概況

1. 第二地銀協地銀35行の提携により、現金自動設備の相互利用による現金自動引出しのサービス（略称SCS）を行っております。
2. 第二地銀協地銀35行、都市銀行5行、信託銀行3行、地方銀行61行、信用金庫255金庫（信金中央金庫を含む）、信用組合139組合（全信組連を含む）、系統農協・信漁連540（農林中金、信連を含む）、労働金庫14金庫（労金連を含む）との提携により、現金自動設備の相互利用による現金自動引出しのサービス（略称MICS）を行っております。
3. 第二地銀協地銀35行の提携により、通信回線を利用したデータ伝送の方法による取引先企業との間の総合振込等のデータの授受のサービスおよび入出金取引明細等のマルチバンクレポートサービス（略称SDS）を行っております。
4. 株式会社ゆうちょ銀行との提携により、現金自動設備の相互利用による現金自動引出し等のサービスを行っております。
5. イオン銀行との提携により、現金自動設備の相互利用による現金自動引出し時の利用手数料の無料サービスを行っております。
6. 沖縄県内5金融機関（当行・琉球銀行・沖縄銀行・コザ信用金庫・沖縄県農業協同組合）で店舗外現金自動設備の一部共同運営を行い、現金引出し等のサービスを行っております。
7. 株式会社イーネット及び株式会社セブン銀行、株式会社ローソン銀行と提携し、共同設置現金自動設備による現金自動引出し等のサービスを行っております。
8. 九州地区無料開放提携9行により、現金自動設備の相互利用による現金自動引出し時の利用手数料の無料サービスを行っております。
9. 株式会社琉球銀行とバックオフィス業務の共同化を目的として共同出資会社（ゆいパートナーサービス株式会社）を設立しております。

(7) 事業譲渡等の状況

該当ございません。

(8) その他銀行の現況に関する重要な事項

該当ございません。

2. 会社役員（取締役及び監査役）に関する事項

(1) 会社役員状況

(年度末現在)

氏名	地位及び担当	重要な兼職	その他
新城 一史	代表取締役頭取 監査部担当役員		
崎原 正樹	代表取締役専務 総合企画部、人事総務部担当役員		
平川 衛	常務取締役 融資統括部、リスク統括部担当役員 マネロン等対策特命担当		
上地 知朗	常務取締役 事務統括部担当役員 本部・営業店業務効率化推進特命担当		
翁 長 誠	常務取締役 営業統括部、 リテール推進部担当役員		
西里 喜明	取締役（社外役員）	株式会社CSDコンサルタンツ 代表取締役	
小渡 晋治	取締役（社外役員）	株式会社okicom 取締役副社長	
島袋 菜々子	取締役（社外役員）	株式会社HRD labo OKINAWA 専務取締役	
外間 政康	常勤監査役		
金沢 信昭	監査役（社外役員）	くもじ監査法人 代表社員	
横田 哲	監査役（社外役員）	沖縄電力株式会社 代表取締役副社長	

- (注) 1. 取締役西里喜明氏、小渡晋治氏及び島袋菜々子氏は、会社法第2条第15号に定める社外取締役であります。
2. 監査役金沢信昭氏及び横田哲氏は、会社法第2条第16号に定める社外監査役であります。
3. 監査役金沢信昭氏は、公認会計士及び税理士の資格を有しており、財務及び会計に関する相当程度の知見を有するものであります。

(2) 会社役員に対する報酬等

①取締役の報酬等の額又はその算定方法の決定方針に関する事項

当行は、「取締役の個人別の報酬等の内容についての決定に関する方針」（以下「本方針」という。）を2021年6月24日開催の取締役会決議により定めており、その内容は下記のとおりとなります。

取締役の個人別の報酬等の内容についての決定に関する方針

・取締役の個人別報酬の決定に関する方針

当行の取締役の報酬は「固定報酬」のみで構成し、「業績連動報酬」及び「非金銭報酬（株式報酬・ストックオプション等）」は支給しません。

また、取締役退任時は退職慰労金を支給します。

金額については、役位、職責、在任年数その他会社の業績等を総合考慮して決定します。

・報酬付与の時期又は条件の決定に関する方針

取締役の報酬は在任期間中に定期的（月1回）に支払うものとし、退職慰労金は取締役退任後、速やかに支払うものとします。

※部長委嘱取締役の使用人賞与については原則年2回（6月、12月）支払います。

・個人別報酬の内容の決定方法

当行は定款にて「取締役の報酬、賞与、その他の職務執行の対価として当銀行から受ける財産上の利益は、株主総会の決議によって定める」としています。

取締役の具体的な報酬の額は、株主総会において承認された報酬限度額の範囲内において、取締役会で協議の上決定します。

【報酬限度額】（2021年6月24日開催の第74期定時株主総会で決議）

取締役 年額360百万円以内（使用人兼務取締役の使用人分給与を含まない）

※退任取締役の退職慰労金については別途株主総会で決議し、取締役会で金額等を決定致します。

・その他個人別報酬の内容の決定に関する重要な事項

該当ございません。

当事業年度の「取締役の個人別の報酬」については固定報酬となり、金額については、役位、職責、在任年数その他会社の業績等を総合考慮し、取締役会で決定していることから、本方針に沿うものであると判断しております。

②取締役及び監査役の報酬等の総額等

(単位：百万円)

区分	支給人数	報酬等	報酬等の種類別の総額			
			基本報酬	業績連動報酬等	非金銭報酬等	退職慰労金
取締役	10名	130 (30)	100	—	—	30
監査役	3名	26 (5)	20	—	—	5

- (注) 1. 退職慰労金は、当事業年度に計上した役員退職慰労引当金繰入額であり、上記「報酬等」の欄に括弧内書きしております。
2. 上記には、2025年6月25日に退任した取締役2名が含まれております。
3. 参考として、2025年6月25日開催の定時株主総会の決議に基づき、役員退職慰労金を退任取締役2名に対し26百万円支給しております。
4. 2021年6月24日開催の第74期定時株主総会決議による報酬限度額は次のとおりであります（当時の取締役の員数は9名、監査役の員数は3名）。
 取締役 年額360百万円以内（使用人兼務取締役の使用人分給与を含まない）
 監査役 年額 96百万円以内

(3) 責任限定契約

氏名	責任限定契約の内容の概要
西里喜明	会社法第427条第1項の規定に基づき、その職務を行うにあたり善意にして重大な過失がないときは、同法第425条第1項で規定する最低責任限度額をもって損害賠償責任額とする旨の契約を締結しております。
小渡晋治	
島袋菜々子	
金沢信昭	
横田哲	

(4) 補償契約

該当ございません。

(5) 役員等賠償責任保険契約に関する事項

被保険者の範囲	役員等賠償責任保険契約の内容の概要
当行のすべての取締役、監査役、執行役員及び部長	<p>当行は会社法第430条の3第1項に規定する役員等賠償責任保険契約を保険会社との間で締結し、被保険者が会社の役員としての業務につき行った行為（不作為を含む）に起因して損害賠償請求がなされたことにより被保険者が被る損害賠償金や争訟費用等を補償することとしております。</p> <p>ただし、贈収賄などの犯罪行為や意図的に違法行為を行った役員自身の損害等は補償対象外とすることにより、役員等の職務の執行の適正性が損なわれないように措置を講じております。</p> <p>保険料は全額当行が負担しております。</p>

3. 社外役員に関する事項

(1) 社外役員の兼職その他の状況

氏 名	兼職その他の状況
西 里 喜 明	株式会社CSDコンサルタンツ代表取締役 当行は同社と通常の銀行取引を行っております。
小 渡 晋 治	株式会社okicom取締役副社長 当行は同社と通常の銀行取引を行っております。
島 袋 菜々子	株式会社HRD labo OKINAWA専務取締役 当行は同社と通常の銀行取引を行っております。
金 沢 信 昭	くもじ監査法人代表社員 当行は同社と通常の銀行取引を行っております。
横 田 哲	沖縄電力株式会社代表取締役副社長 同社は当行の株主であり、通常の銀行取引を行っております。

(2) 社外役員の主な活動状況

氏 名	在任期間	取締役会等への出席状況	取締役会等における発言その他の活動状況
西 里 喜 明 (社外取締役)	4年9ヵ月	当事業年度開催の取締役会16回中15回に出席しております。	主に中小企業診断士として培った知見を活かし、報告事項や決議事項について適宜質問をするとともに、必要に応じ社外の立場から意見を述べております。
小 渡 晋 治 (社外取締役)	1年9ヵ月	当事業年度開催の取締役会16回全てに出席しております。	主にIT会社役員として培った知見を活かし、報告事項や決議事項について適宜質問をするとともに、必要に応じ社外の立場から意見を述べております。
島 袋 菜々子 (社外取締役)	9ヵ月	就任後に開催された当事業年度開催の取締役会12回全てに出席しております。	主に人材育成会社役員として培った知見を活かし、報告事項や決議事項について適宜質問をするとともに、必要に応じ社外の立場から意見を述べております。
金 沢 信 昭 (社外監査役)	1年9ヵ月	当事業年度開催の取締役会16回全てに出席しております。 当事業年度開催の監査役会12回全てに出席しております。	主に公認会計士として培った知見を活かし、報告事項や決議事項について適宜質問をするとともに、必要に応じ社外の立場から意見を述べております。

氏名	在任期間	取締役会等への出席状況	取締役会等における発言 その他の活動状況
横田 哲 (社外監査役)	1年9ヵ月	当事業年度開催の取締役会 16回中12回に出席しております。 当事業年度開催の監査役会 12回中11回に出席しております。	主に上場会社の役員として培った知見を活かし、報告事項や決議事項について適宜質問をするとともに、必要に応じ社外の立場から意見を述べております。

(3) 社外役員に対する報酬等

(単位：百万円)

	支給人数	銀行からの報酬等	銀行の親会社等 からの報酬等
報酬等の合計	6名	24	—

- (注) 1. 上記には、当事業年度に計上した役員退職慰労引当金繰入額 6百万円を含めております。
2. 上記には、当事業年度に退任した社外取締役 1名の報酬を含めております。
3. 参考として、2025年6月25日開催の定時株主総会の決議に基づき、役員退職慰労金を社外取締役 1名に対し6百万円支給しております。

(4) 社外役員の意見

該当ございません。

4. 当行の株式に関する事項

(1) 株式数	発行可能株式総数	
	普通株式	6,000千株
	第1回A種優先株式	500千株
	第2回A種優先株式	500千株
	発行済株式の総数	
	普通株式	3,400千株

(注) 定款で定める発行可能株式総数は6,000千株であり、上記の発行可能株式総数の合計とは一致いたしません。

(2) 当年度末株主数	普通株式	2,280名
-------------	------	--------

(3) 大株主

普通株式

株主の氏名又は名称	当行への出資状況	
	持株数	持株比率
西平経史	257 千株	7.58 %
沖縄土地住宅株式会社	205	6.06
沖縄海邦銀行行員持株会	164	4.85
株式会社みずほ銀行	137	4.06
株式会社三菱UFJ銀行	137	4.05
沖縄電力株式会社	134	3.96
比嘉良雄	127	3.76
日本生命保険相互会社	117	3.46
大同火災海上保険株式会社	101	2.98
中央産業株式会社	67	1.99

- (注) 1. 持株数は、千株未満を切り捨てて表示しております。
2. 持株比率は、自己株式(8,873株)を控除して算出し、小数点第3位以下を切り捨てて表示しております。

(4) 当事業年度中に職務執行の対価として会社役員に交付した株式の状況 該当ございません。

5. 当行の新株予約権等に関する事項

- (1) 事業年度の末日において当行の会社役員が有している当行の新株予約権等
該当ございません。
- (2) 事業年度中に使用人等に交付した当行の新株予約権等
該当ございません。

6. 会計監査人に関する事項

(1) 会計監査人の状況

(単位：百万円)

氏名又は名称	当該事業年度に係る報酬等	その他
EY新日本有限責任監査法人 指定有限責任社員 川口 輝朗 指定有限責任社員 前野 信哉	40	(報酬等について監査役会が同意した理由) (注) 3 (非監査業務) (注) 4

- (注) 1. 当行と会計監査人との間の監査契約において、会社法上の監査と金融商品取引法上の監査についての報酬額を明確に区分しておらず、実質的にも区分できないため、当該事業年度に係る報酬等にはこれらの合計額を記載しております。
2. 当行、子会社及び子法人等が支払うべき金銭その他の財産上の利益の合計額は40百万円であります。
3. 当行監査役会は、日本監査役協会が公表する「会計監査人との連携に関する実務指針」を踏まえ、監査計画の内容、従前の事業年度における職務執行状況や報酬額の見積りの算出根拠などを確認し、検討した結果、会計監査人の報酬等につき、会社法第399条第1項の同意を行っております。
4. 当行は会計監査人に対して、非監査業務である「新リース会計基準に関するアドバイザリー」に対し3百万円を支払っております。

(2) 責任限定契約

該当ございません。

(3) 補償契約

該当ございません。

(4) 会計監査人に関するその他の事項

会計監査人の解任又は不再任の決定の方針

監査役会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号に該当すると判断される場合、その事実に基づき会計監査人を解任する方針です。

また、監査役会は、上記の場合のほか、会計監査人の職務の執行に関する状況等を総合的に勘案し、その必要があると判断した場合には会計監査人の不再任に関する議案の内容を決定する方針です。

なお、監査役会は、上記方針に基づき、会計監査人の解任または不再任の検討を毎年実施いたします。

7. 財務及び事業の方針の決定を支配する者の在り方に関する基本方針

特に定めておりません。

8. 業務の適正を確保する体制

(1) 取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- イ 当行は、取締役会において「コンプライアンスの基本方針及び遵守基準」、「コンプライアンス・マニュアル」を策定して、その周知徹底を図る。
- ロ 取締役会において年度毎に「コンプライアンス・プログラム」を策定し、その実施状況を取締役会へ報告する。
- ハ 本部にコンプライアンス統括部署を設置するとともに、各営業店にコンプライアンス統括責任者及びコンプライアンス責任者を設置して、コンプライアンスに関する情報を一元的に管理する。
- ニ リスク統括委員会を設置し、コンプライアンスに関する事項について審議・決定する。
- ホ 事業年度ごとに、取締役及び使用人を対象としたコンプライアンス研修を実施する。
- ヘ 事故防止のため、使用人の人事ローテーションや連続休暇制度を実施する。
- ト 取締役及び使用人が、コンプライアンス統括部署に設置した通報窓口に対して、法令違反等の情報を通報することができる旨を「コンプライアンス規程」に定める。

(2) 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

当行は、取締役会をはじめ、重要な会議の意思決定に係る記録や取締役の職務の執行に係る情報を適正に記録し「取締役会規程」、「常務会規程」、「文書規程」等に基づき適正に保存・管理する。

(3) 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- イ 当行は、適切なリスク管理を行うため、各リスクの管理方針を取締役会において定め、管理体制及び規程等を取締役会等において決定する。
- ロ 監査部を設置し、取締役会において「内部監査規程」を制定する。内部監査方針、重点項目等の内部監査計画の基本事項を取締役会で決定し、内部監査実施結果については、取締役会へ報告する。
- ハ 当行は、「大規模災害危機管理マニュアル」を定め、経営に重大な影響を与える危機（緊急事態）に直面し業務の継続に支障をきたす（または恐れのある）場合、損害の範囲と業務への影響を極小化するため、迅速かつ効率的な障害の復旧及び業務の継続・早期正常化を図る。

(4) 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

- イ 当行は、取締役会を毎月（定時）開催するほか、必要に応じて随時に開催する。また常務会を毎週開催し、取締役会の委任を受けた事項について、迅速に意思決定を図る。
- ロ 取締役及び使用人の職務の執行が効率的になされるよう「組織規程」、「職務権限規程」等を取締役会において制定する。

(5) 当行並びに子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

- イ 当行は、子会社においても業務の決定及び執行についての相互監視が適正になされるよう、取締役会と監査役を設置する。
- ロ 「関係会社管理規程」を制定し、子会社の重要な業務の決定を当行が管理するとともに、子会社から適宜業務の報告を受ける。
- ハ 当行は、子会社への監査を通じて子会社の規模・特性に応じたリスク管理態勢や法令遵守態勢の整備を図る。
- ニ 子会社においてもコンプライアンスに関するマニュアル等を制定し、責任者を配置する。

(6) 監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項

当行は、監査役の職務を補助するため、監査役から求められた場合には、監査役と協議のうえ監査補助者を任命する。

(7) 前号の使用人の取締役からの独立性に関する事項及び監査役の当該使用人に対する指示の実効性に関する事項

任命された監査補助者の人事に関しては、取締役と監査役が意見交換を行う。

(8) 取締役及び使用人または子会社の取締役及び使用人もしくはこれらの者から報告を受けた者が監査役に報告するための体制その他の監査役への報告に関する体制

取締役及び使用人は、子会社の取締役及び使用人より報告を受けた事項や、法令等の違反行為、当行及び当行グループに著しい損害を及ぼすおそれのある事実、銀行法に定める不祥事件等について発見した場合、その内容を速やかに監査役へ報告する。

(9) 前号の報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制

監査役に報告を行ったことを理由として、当該報告を行った者に対して不利益な取扱いをすることを禁止し、その旨を当行及び子会社において周知徹底する。

(10) 監査役の職務の執行について生ずる費用又は債務の処理に関する事項

当行は、監査役の職務の遂行上必要と認める費用について予算を措置する。ただし、緊急又は臨時に支出した費用について、監査役は事後に請求することができることとし、当該費用が監査役の職務の遂行に必要であると認める場合には、当行は速やかにこれを支払う。

(11) その他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制

イ 当行は、株主総会に付議する監査役選任議案の決定にあたっては、監査役会とあらかじめ協議し同意を得る。

ロ 監査役は、取締役会はもとより、常務会等の重要な意思決定会議に出席する。

ハ 代表取締役は、監査役会と定期的に、当行が対処すべき課題、監査役監査の環境整備の状況、監査上の重要課題等について意見を交換する。

(12) 反社会的勢力排除に向けた基本方針と体制

市民生活の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力に対しては、組織全体として対応し、平素より取引防止や関係遮断に取組み、不当要求に対しては、法的対抗措置を講じる等、断固たる態度で対応する。

(業務の適正を確保するための体制の運用状況の概要)

当行並びに子会社から成る企業集団における内部統制システムの主な運用状況は以下のとおりです。

(1) コンプライアンス体制

取締役会において年度毎にコンプライアンス・プログラムを策定し、以下の取組みを行っています。

- ・全職員を対象としたコンプライアンス研修の実施
- ・全職員を対象としたコンプライアンス勉強会（毎月）の実施
- ・担当部によるコンプライアンス臨店指導の実施
- ・顧問弁護士による、役員、部長等へのコンプライアンスセミナーの開催
- ・年に2回コンプライアンス強化月間を設定、職務会及びアンケートを実施
- ・役員等によるコンプライアンス臨店・職務会の実施
- ・顧客情報管理の強化

そのほか、毎月、リスク統括委員会を開催しコンプライアンスに関する審議を行っています。

(2) リスク管理体制

イ 取締役会においてリスク管理統括規程を定めており、各リスク管理規程においてリスク管理基本方針を定めています。

ロ 当行は統合的リスク管理を行っており、全体のリスク量を自己資本に見合った水準に制御し健全経営を行うため、以下の取組みを実施しています。

- ① 取締役会において通期毎にリスク限度枠を設定し、営業部門、市場部門など部門ごとにリスク量を計測し、限度枠を遵守するよう管理を行っています。
 - ② 限度枠の遵守状況については毎月モニタリングを実施し、半期毎にリスク統括委員会および取締役会へ報告を行っています。
- ハ 監査部は内部監査計画に基づき、営業店、本部、子会社等の内部監査を実施し、監査結果を取締役会へ報告しています。

(3) 企業集団における業務の適正性の確保

半期毎に当行の経営陣と子会社の経営陣において情報交換会を開催し、経営課題の把握と対応方針について協議しています。

(4) 監査役の監査が実効的に行われることの確保

常勤監査役は、取締役会のほか常務会やリスク統括委員会など重要な会議に出席し、必要に応じて意見を述べているほか、代表取締役ほか取締役と意見交換を実施しています。

また、監査役は、代表取締役等との意見交換を実施し、内部監査部門、会計監査人から定期的に報告を受け、意見交換を実施しています。必要に応じ情報交換を随時行うなど連携強化を図っています。

監査役の監査が円滑に行われるよう使用人1名を監査補助者として配置しています。

9. 特定完全子会社に関する事項

該当ございません。

10. 親会社等との間の取引に関する事項

該当ございません。

11. 会計参与に関する事項

該当ございません。

12. その他

該当ございません。

第79期末 (2026年3月31日現在) 貸借対照表

(単位：百万円)

科 目	金 額	科 目	金 額
(資産の部)		(負債の部)	
現金預け	113,688	預金	767,496
現金	11,087	当座預金	2,501
預け	102,601	普通預金	565,901
有価証券	109,815	貯蓄預金	4,371
国債	39,934	定期預金	177,927
地方債	33,383	その他の預金	16,793
社債	24,580	その他の負債	5,911
株式	6,382	未払法人税等	380
その他の証券	5,533	未払費用	773
貸出金	582,372	前受収益	273
割引手形	314	リース負債	597
引当金	35,363	資産除去負債	151
手証	518,115	その他の負債	3,735
当座貸	28,580	賞与引当金	358
その他の資産	2,580	退職給付引当金	308
前払費用	69	役員退職慰労引当金	139
未収収益	796	偶発損失引当金	126
その他の資産	1,715	支払承諾	3,248
有形固定資産	8,194	負債の部合計	777,589
建物	3,766	(純資産の部)	
土地	3,377	資本剰余金	4,537
リース資産	521	資本準備金	3,219
その他の有形固定資産	528	利益剰余金	38,465
無形固定資産	568	利益準備金	4,537
ソフトウェア	510	その他の利益剰余金	33,927
その他の無形固定資産	57	別途積立金	29,895
前払年金費用	1,132	事務機械化準備金	400
繰延税金資産	2,187	圧縮記帳積立金	18
支払引当金	3,248	繰越利益剰余金	3,613
貸倒引当金	△3,499	自己株式	△31
		株主資本合計	46,191
		その他の有価証券評価差額金	△3,490
		評価・換算差額等合計	△3,490
資産の部合計	820,289	純資産の部合計	42,700
		負債及び純資産の部合計	820,289

第79期 (2025年4月1日から) 株主資本等変動計算書
(2026年3月31日まで)

(単位：百万円)

	株 主 資 本			
	資 本 金	資 本 剰 余 金		利 益 剰 余 金
		資 本 準 備 金	資 本 剰 余 金 合 計	利 益 準 備 金
当期首残高	4,537	3,219	3,219	4,537
当期変動額				
剰余金の配当				
別途積立金の積立				
圧縮記帳積立金の取崩				
当期純利益				
自己株式の取得				
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)				
当期変動額合計	-	-	-	-
当期末残高	4,537	3,219	3,219	4,537

(単位：百万円)

	株 主 資 本				
	利 益 剰 余 金				
	そ の 他 利 益 剰 余 金				利 益 剰 余 金 合 計
	別 途 積 立 金	事 務 機 械 化 準 備 金	圧 縮 記 帳 積 立 金	繰 越 利 益 剰 余 金	
当期首残高	29,395	400	19	2,593	36,945
当期変動額					
剰余金の配当				△169	△169
別途積立金の積立	500			△500	-
圧縮記帳積立金の取崩			△0	0	-
当期純利益				1,689	1,689
自己株式の取得					
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	500	-	△0	1,020	1,519
当期末残高	29,895	400	18	3,613	38,465

(単位：百万円)

	株 主 資 本		評 価 ・ 換 算 差 額 等		純資産 合 計
	自 己 株 式	株 主 資 本 合 計	そ の 他 有 価 証 券 評 価 差 額 金	評 価 ・ 換 算 差 額 等 合 計	
当期首残高	△31	44,671	△3,461	△3,461	41,210
当期変動額					
剰余金の配当		△169			△169
別途積立金の積立		-			-
圧縮記帳積立金の取崩		-			-
当期純利益		1,689			1,689
自己株式の取得	△0	△0			△0
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)			△29	△29	△29
当期変動額合計	△0	1,519	△29	△29	1,490
当期末残高	△31	46,191	△3,490	△3,490	42,700

第79期 個別注記表

記載金額は百万円未満を切り捨てて表示しております。

重要な会計方針

1. 商品有価証券の評価基準及び評価方法
商品有価証券の評価は、時価法（売却原価は移動平均法により算定）により行っております。
2. 有価証券の評価基準及び評価方法
有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、子会社・子法人等株式及び関連法人等株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については時価法（売却原価は移動平均法により算定）、ただし市場価格のない株式等については移動平均法による原価法により行っております。
なお、その他有価証券の評価差額については、組込デリバティブを一体処理したことにより損益に反映させた額を除き、全部純資産直入法により処理しております。
3. デリバティブ取引の評価基準及び評価方法
デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。
4. 固定資産の減価償却の方法
 - (1) 有形固定資産（リース資産を除く）
有形固定資産は、それぞれ次のとおり償却しております。
建 物 定額法を採用しております。
その他 定率法を採用しております。
また、主な耐用年数は次のとおりであります。
建 物 50年
その他 2年～20年
 - (2) 無形固定資産（リース資産を除く）
無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、行内における利用可能期間（5年）に基づいて償却しております。
 - (3) リース資産
所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。
5. 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準
外貨建資産・負債は、決算日の為替相場による円換算額を付しております。

6. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下、「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下、「実質破綻先」という。）に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額（以下、「未保全額」という。）を計上しております。

また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者（以下、「破綻懸念先」という。）に係る債権のうち、未保全額が一定額以上の大口債務者については、回収可能額を個別に見積り、必要と認める額を計上し、それ以外の債務者については、未保全額に3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定したものを乗じた額を計上しております。

上記以外の債権については、主として今後1年間の予想損失額又は今後3年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、1年間又は3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は321百万円であります。

(2) 賞与引当金

賞与引当金は、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当事業年度に帰属する額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。なお、数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

数理計算上の差異：各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（5年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌事業年度から損益処理

(4) 役員退職慰労引当金

役員退職慰労引当金は、役員の退職慰労金の支払いに備えるため、内規に基づく期末要支給額を計上しております。

(5) 偶発損失引当金

偶発損失引当金は、責任共有制度による信用保証協会への負担金の支払いに備えるため、将来の支払見込額を計上しております。

7. 収益の計上方法

顧客との契約から生じる収益は、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額を認識しております。

8. ヘッジ会計の方法

為替変動リスク・ヘッジ

外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第25号 2020年10月8日）に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

9. 消費税等の会計処理

固定資産に係る控除対象外消費税等は当事業年度の費用に計上しております。

重要な会計上の見積り

会計上の見積りにより当事業年度に係る計算書類にその額を計上した項目であって、翌事業年度に係る計算書類に重要な影響を及ぼす可能性があるものは、次のとおりです。

貸倒引当金

(1) 当事業年度に係る計算書類に計上した額

貸倒引当金3,499百万円

(うち、破綻懸念先に係る債権のうち、未保全額が一定額以上の大口債務者に対する貸倒引当金1,603百万円)

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する理解に資する情報

①算出方法

貸倒引当金の算出方法は、「重要な会計方針 6. 引当金の計上基準 (1) 貸倒引当金」に記載しております。

②主要な仮定

・債務者区分の判定における主要な仮定は貸出先の将来の業績の見通しであります。貸出先の将来の業績見通しは、各債務者が策定した経営改善計画等に基づき、収益獲得能力を個別に評価し、設定しております。

・破綻懸念先に係る債権のうち、未保全額が一定額以上の大口債務者に対する貸倒引当金の個別見積りにおける主要な仮定は、債務者の将来の返済見込額及び担保処分による回収見込額であります。

③翌事業年度に係る計算書類に及ぼす影響

個別貸出先の業績変化等により、当初の見積りに用いた仮定が変化した場合は、翌事業年度に係る計算書類における貸倒引当金に重要な影響を及ぼす可能性があります。

注記事項

(貸借対照表関係)

1. 関係会社の株式総額 85百万円
2. 銀行法及び金融機能の再生のための緊急措置に関する法律に基づく債権は次のとおりであります。なお、債権は、貸借対照表の「有価証券」中の社債（その元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が有価証券の私募（金融商品取引法第2条第3項）によるものに限る。）、貸出金、「その他資産」中の未収利息及び仮払金並びに支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに注記されている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券（使用貸借又は賃貸借契約によるものに限る。）であります。

破産更生債権及びこれらに準ずる債権額	2,792	百万円
危険債権額	7,327	百万円
要管理債権額	4,084	百万円
三月以上延滞債権額	-	百万円
貸出条件緩和債権額	4,084	百万円
小計額	14,203	百万円
正常債権額	571,993	百万円
合計額	586,196	百万円

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権であります。

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権で破産更生債権及びこれらに準ずる債権に該当しないものであります。

三月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から三月以上遅延している貸出金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権並びに危険債権に該当しないものであります。

貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権、危険債権並びに三月以上延滞債権に該当しないものであります。

正常債権とは、債務者の財政状態及び経営成績に特に問題がないものとして、破産更生債権及びこれらに準ずる債権、危険債権、三月以上延滞債権並びに貸出条件緩和債権以外のものに区分される債権であります。

上記債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

3. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第24号 2022年3月17日）に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた銀行引受手形、商業手形、荷付為替手形等は、売却又は（再）担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は314百万円であります。

4. 担保に供している資産は次のとおりであります。
 担保に供している資産
 有価証券 18,031百万円
 上記のほか、為替決済、公金収納等の取引の担保として、有価証券5,957百万円及び保証金11百万円を差し入れております。
 また、その他の資産には、保証金160百万円が含まれております。
5. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸し付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は、44,466百万円であります。このうち原契約期間が1年以内のもの又は任意の時期に無条件で取消可能なものが44,466百万円あります。
 なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全、その他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。
6. 有形固定資産の減価償却累計額 8,666百万円
 7. 取締役及び監査役との間の取引による取締役及び監査役に対する金銭債権総額 29百万円
 8. 関係会社に対する金銭債務総額 157百万円

(損益計算書関係)

1. 関係会社との取引による収益
- | | |
|----------------------|-------|
| 資金運用取引に係る収益総額 | 0 百万円 |
| 役務取引等に係る収益総額 | 0 百万円 |
| その他業務・その他経常取引に係る収益総額 | - 百万円 |
| その他の取引に係る収益総額 | - 百万円 |
- 関係会社との取引による費用
- | | |
|----------------------|---------|
| 資金調達取引に係る費用総額 | 0 百万円 |
| 役務取引等に係る費用総額 | - 百万円 |
| その他業務・その他経常取引に係る費用総額 | 170 百万円 |
| その他の取引に係る費用総額 | - 百万円 |
2. 関連当事者との間の取引
 該当事項はありません。

3. 当事業年度において、営業利益の減少によるキャッシュ・フローの低下により投資額の回収が見込めなくなった以下の資産について、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

地域	主な用途	種類	減損損失
沖縄県那覇市他	営業用店舗 4 ヶ所	建物その他	60百万円

営業用店舗については最小区分である営業店単位（出張所については母店に含めております。）でグルーピングを行っており、遊休資産については各々独立した単位として取り扱っております。

回収可能価額は正味売却価額により測定しております。正味売却価額は、路線価、固定資産税評価額等から処分費用見込額を控除して算定しております。

(株主資本等変動計算書関係)

自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位：千株)

	当事業年度 期首株式数	当事業年度 増加株式数	当事業年度 減少株式数	当事業年度末 株式数	摘要
自己株式					
普通株式	8	0	-	8	(注)
合計	8	0	-	8	

(注) 自己株式の増加160株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

(有価証券関係)

貸借対照表の「国債」「地方債」「社債」「株式」「その他の証券」が含まれております。

1. 売買目的有価証券（2026年3月31日現在）
該当事項はありません。
2. 満期保有目的の債券（2026年3月31日現在）
該当事項はありません。
3. 子会社・子法人等株式及び関連法人等株式（2026年3月31日現在）
子会社・子法人等株式及び関連法人等株式で時価のあるものはありません。

(注) 市場価格のない株式等の貸借対照表計上額

	貸借対照表計上額（百万円）
子会社・子法人等株式	80
関連法人等株式	5

4. その他有価証券（2026年3月31日現在）

	種 類	貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差 額 (百万円)
貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株 式	4,349	2,064	2,284
	債 券	-	-	-
	国 債	-	-	-
	地 方 債	-	-	-
	短期社債	-	-	-
	社 債	-	-	-
	その他	5,058	3,076	1,981
	小 計	9,407	5,141	4,266
貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	株 式	37	43	△5
	債 券	97,899	107,303	△9,404
	国 債	39,934	48,048	△8,113
	地 方 債	33,383	33,935	△551
	短期社債	-	-	-
	社 債	24,580	25,319	△738
	その他	359	362	△2
	小 計	98,296	107,709	△9,412
合 計		107,704	112,850	△5,146

(注) 上表に含まれない市場価格のない株式等及び組合出資金の貸借対照表計上額

	貸借対照表計上額 (百万円)
非上場株式	1,910
組合出資金	115

組合出資金については、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 2021年6月17日）第24-16項に基づき、時価開示の対象とはしておりません。

5. 当事業年度中に売却した満期保有目的の債券
(自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)
該当事項はありません。
6. 当事業年度中に売却したその他有価証券
(自 2025年4月1日 至 2026年3月31日)

	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株 式	799	329	12
債 券	6,280	-	1,702
国 債	6,280	-	1,702
地 方 債	-	-	-
短期社債	-	-	-
社 債	-	-	-
その他	2,415	667	-
合 計	9,495	996	1,714

7. 保有目的を変更した有価証券
該当事項はありません。
8. 減損処理を行った有価証券
 売買目的有価証券以外の有価証券（市場価格のない株式等及び組合出資金を除く）のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落している場合、当該時価をもって貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当事業年度の損失として処理（以下「減損処理」という。）しております。
 当事業年度における減損処理額はありません。
 また、時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、時価が取得原価に比べ50%以上下落している場合は、著しい下落と判断し、30%以上50%未満下落している場合は、過去一定期間の時価の状況や発行会社の信用リスク等を勘案し判定しております。

(金銭の信託関係)
該当事項はありません。

(税効果会計関係)

繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳は、それぞれ次のとおりであります。

繰延税金資産	
貸倒引当金	1,165百万円
有価証券評価損	250
退職給付引当金	95
賞与引当金	110
その他有価証券評価差額金	1,655
その他	382
繰延税金資産小計	<u>3,659</u>
評価性引当額	<u>△1,083</u>
繰延税金資産合計	<u>2,576</u>
繰延税金負債	
その他	389
繰延税金負債合計	<u>389</u>
繰延税金資産の純額	<u>2,187百万円</u>

(1株当たり情報)

1株当たりの純資産額	12,591円74銭
1株当たりの当期純利益金額	498円20銭

連結貸借対照表 (2026年3月31日現在)

(単位：百万円)

科 目	金 額	科 目	金 額
(資産の部)		(負債の部)	
現 金 預 け 金	113,688	預 金	767,346
有 価 証 券	109,735	そ の 他 負 債	5,909
貸 出 金	582,372	賞 与 引 当 金	361
そ の 他 資 産	2,655	退 職 給 付 に 係 る 負 債	259
有 形 固 定 資 産	8,194	役 員 退 職 慰 労 引 当 金	140
建 物	3,766	偶 発 損 失 引 当 金	126
土 地	3,377	支 払 承 諾	3,248
リ ー ス 資 産	521	負 債 の 部 合 計	777,392
その他の有形固定資産	528	(純資産の部)	
無 形 固 定 資 産	568	資 本 金	4,537
ソ フ ト ウ ェ ア	510	資 本 剰 余 金	3,219
その他の無形固定資産	57	利 益 剰 余 金	38,565
退 職 給 付 に 係 る 資 産	1,825	自 己 株 式	△31
繰 延 税 金 資 産	1,960	株 主 資 本 合 計	46,290
支 払 承 諾 見 返	3,248	そ の 他 有 価 証 券 評 価 差 額 金	△3,490
貸 倒 引 当 金	△3,499	退 職 給 付 に 係 る 調 整 累 計 額	513
		そ の 他 の 包 括 利 益 累 計 額 合 計	△2,977
		非 支 配 株 主 持 分	44
		純 資 産 の 部 合 計	43,358
資 産 の 部 合 計	820,750	負 債 及 び 純 資 産 の 部 合 計	820,750

連結損益計算書 (2025年4月1日から
2026年3月31日まで)

(単位：百万円)

科 目		金	額
経	常 収 益		16,009
資	金 運 用 収 益	13,083	
	貸 出 金 利 息	11,799	
	有 価 証 券 利 息 配 当 金	853	
	コー ー ル ロ ー ン 利 息 及 び 買 入 手 形 利 息	6	
	預 け 金 利 息	424	
役	務 取 引 等 収 益	1,637	
そ	の 他 業 務 収 益	333	
そ	の 他 経 常 収 益	954	
	貸 倒 引 当 金 戻 入 益	160	
	償 却 債 権 取 立 益	32	
	そ の 他 の 経 常 収 益	760	
経	常 費 用		13,841
資	金 調 達 費 用	1,514	
	預 金 利 息	1,504	
	借 用 金 利 息	0	
	そ の 他 の 支 払 利 息	10	
役	務 取 引 等 費 用	986	
そ	の 他 業 務 費 用	1,702	
営	業 他 経 常 費 用	9,165	
そ	の 他 の 経 常 費 用	473	
	そ の 他 の 経 常 費 用	473	
経	特 常 別 利 益		2,167
特	固 定 資 産 処 分 益	0	
	店 舗 移 設 費 負 担 金 受 入 額	76	
	特 別 損 失		81
	固 定 資 産 処 分 損 失	20	
	減 損 損 失	60	
税	金 等 調 整 前 当 期 純 利 益		2,162
法	人 税、 住 民 税 及 び 事 業 税	524	
法	人 税 等 調 整 額	△68	
法	人 税 等 合 計		455
当	期 純 利 益		1,707
非	支 配 株 主 に 帰 属 す る 当 期 純 利 益		3
親	会 社 株 主 に 帰 属 す る 当 期 純 利 益		1,703

連結株主資本等変動計算書 （2025年4月1日から 2026年3月31日まで）

(単位：百万円)

	株 主 資 本				
	資 本 金	資本剰余金	利益剰余金	自 己 株 式	株主資本合計
当期首残高	4,537	3,219	37,031	△31	44,757
当期変動額					
剰余金の配当			△169		△169
親会社株主に帰属する当期純利益			1,703		1,703
自己株式の取得				△0	△0
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	-	-	1,534	△0	1,533
当期末残高	4,537	3,219	38,565	△31	46,290

(単位：百万円)

	その他の包括利益累計額			非支配株主分 持	純資産 合計
	そ の 他 有 価 証 券 評 価 差 額 金	退 職 給 付 に 係 る 調 整 累 計 額	そ の 他 の 包 括 利 益 累 計 額 合 計		
当期首残高	△3,461	166	△3,294	41	41,503
当期変動額					
剰余金の配当					△169
親会社株主に帰属する当期純利益					1,703
自己株式の取得					△0
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	△29	346	317	3	320
当期変動額合計	△29	346	317	3	1,854
当期末残高	△3,490	513	△2,977	44	43,358

連結注記表

記載金額は百万円未満を切り捨てて表示しております。

連結計算書類の作成方針

子会社、子法人等及び関連法人等の定義は、銀行法第2条第8項及び銀行法施行令第4条の2に基づいております。

1. 連結の範囲に関する事項
連結される子会社及び子法人等 1社
会社名
株式会社海邦総研
2. 持分法の適用に関する事項
持分法非適用の関連法人等 1社
会社名
ゆいパートナーサービス株式会社
持分法非適用の関連法人等は、当期純損益（持分に見合う額）、利益剰余金（持分に見合う額）及びその他の包括利益累計額（持分に見合う額）等からみて、持分法の対象から除いても連結計算書類に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除いております。
3. 連結される子会社及び子法人等の事業年度に関する事項
連結される子会社及び子法人等の決算日は次のとおりであります。
3月末日 1社

会計方針に関する事項

1. 商品有価証券の評価基準及び評価方法
商品有価証券の評価は、時価法（売却原価は移動平均法により算定）により行っております。
2. 有価証券の評価基準及び評価方法
有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、持分法非適用の関連法人等株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については時価法（売却原価は移動平均法により算定）、ただし市場価格のない株式等については移動平均法による原価法により行っております。
なお、その他有価証券の評価差額については、組込デリバティブを一体処理したことにより損益に反映させた額を除き、全部純資産直入法により処理しております。
3. デリバティブ取引の評価基準及び評価方法
デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。
4. 固定資産の減価償却の方法
(1) 有形固定資産（リース資産を除く）
当行の有形固定資産は、それぞれ次のとおり償却しております。
建物 定額法を採用しております。
その他 定率法を採用しております。

また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 50年
その他 2年～20年

連結される子会社及び子法人等の有形固定資産については、資産の見積耐用年数に基づき、主として定額法により償却しております。

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当行並びに連結される子会社及び子法人等で定める利用可能期間（主として5年）に基づいて償却しております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のは零としております。

5. 貸倒引当金の計上基準

貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下、「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下、「実質破綻先」という。）に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額（以下、「未保全額」という。）を計上しております。

また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者（以下、「破綻懸念先」という。）に係る債権のうち、未保全額が一定額以上の大口債務者については、回収可能額を個別に見積り、必要と認める額を計上し、それ以外の債務者については、未保全額に3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定したものを乗じた額を計上しております。

上記以外の債権については、主として今後1年間の予想損失額又は今後3年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、1年間又は3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は321百万円であります。

6. 賞与引当金の計上基準

賞与引当金は、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当連結会計年度に帰属する額を計上しております。

7. 役員退職慰労引当金の計上基準

役員退職慰労引当金は、役員の退職慰労金の支払いに備えるため、内規に基づく期末要支給額を計上しております。

8. 偶発損失引当金の計上基準
偶発損失引当金は、責任共有制度による信用保証協会への負担金の支払いに備えるため、将来の支払見込額を計上しております。
9. 退職給付に係る会計処理の方法
退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。また、数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。
数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（5年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌連結会計年度から損益処理
10. 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準
当行の外貨建資産・負債は、連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。
11. 収益の計上方法
顧客との契約から生じる収益は、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額を認識しております。
12. 重要なヘッジ会計の方法
為替変動リスク・ヘッジ
当行の外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第25号 2020年10月8日）に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

重要な会計上の見積り

会計上の見積りにより当連結会計年度に係る連結計算書類にその額を計上した項目であって、翌連結会計年度に係る連結計算書類に重要な影響を及ぼす可能性があるものは、次のとおりです。

貸倒引当金

- (1) 当連結会計年度に係る連結計算書類に計上した額

貸倒引当金3,499百万円

(うち、破綻懸念先に係る債権のうち、未保全額が一定額以上の大口債務者に対する貸倒引当金1,603百万円)

- (2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する理解に資する情報

①算出方法

貸倒引当金の算出方法は、「会計方針に関する事項 5. 貸倒引当金の計上基準」に記載しております。

②主要な仮定

・債務者区分の判定における主要な仮定は貸出先の将来の業績の見通しであります。貸出先の将来の業績見通しは、各債務者が策定した経営改善計画等に基づき、収益獲得能力を個別に評価し、設定しております。

・破綻懸念先に係る債権のうち、未保全額が一定額以上の大口債務者に対する貸倒引当金の個別見積りににおける主要な仮定は、債務者の将来の返済見込額及び担保処分による回収見込額であります。

③翌連結会計年度に係る連結計算書類に及ぼす影響

個別貸出先の業績変化等により、当初の見積りに用いた仮定が変化した場合は、翌連結会計年度に係る連結計算書類における貸倒引当金に重要な影響を及ぼす可能性があります。

注記事項

(連結貸借対照表関係)

1. 関係会社の株式総額 5百万円

2. 銀行法及び金融機能の再生のための緊急措置に関する法律に基づく債権は次のとおりであります。なお、債権は、連結貸借対照表の「有価証券」中の社債（その元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が有価証券の私募（金融商品取引法第2条第3項）によるものに限る。）、貸出金、「その他資産」中の未収利息及び仮払金並びに支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに注記されている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券（使用貸借又は賃貸借契約によるものに限る。）であります。

破産更生債権及びこれらに準ずる債権額	2,792	百万円
危険債権額	7,327	百万円
要管理債権額	4,084	百万円
三月以上延滞債権額	-	百万円
貸出条件緩和債権額	4,084	百万円
小計額	14,203	百万円
正常債権額	571,993	百万円
合計額	586,196	百万円

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権であります。

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権で破産更生債権及びこれらに準ずる債権に該当しないものであります。

三月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から三月以上遅延している貸出金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権並びに危険債権に該当しないものであります。

貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権、危険債権並びに三月以上延滞債権に該当しないものであります。

正常債権とは、債務者の財政状態及び経営成績に特に問題がないものとして、破産更生債

権及びこれらに準ずる債権、危険債権、三月以上延滞債権並びに貸出条件緩和債権以外のものに区分される債権であります。

上記債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

3. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第24号 2022年3月17日)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた銀行引受手形、商業手形、荷付為替手形等は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は、314百万円であります。

4. 担保に供している資産は次のとおりであります。

担保に供している資産

有価証券 18,031百万円

上記のほか、為替決済、公金収納等の取引の担保として、有価証券5,957百万円及び保証金11百万円を差し入れております。

また、その他資産には、保証金162百万円が含まれております。

5. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸し付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は、44,466百万円であります。このうち原契約期間が1年以内のもの又は任意の時期に無条件で取消可能なものが44,466百万円あります。

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行及び連結される子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全、その他相当の事由があるときは、当行及び連結される子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

6. 有形固定資産の減価償却累計額 8,668百万円

(連結損益計算書関係)

1. 「その他の経常費用」には、貸出金償却63百万円、株式等売却損12百万円を含んでおります。

2. 当連結会計年度において、営業利益の減少によるキャッシュ・フローの低下により投資額の回収が見込めなくなった以下の資産について、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

地域	主な用途	種類	減損損失
沖縄県那覇市他	営業用店舗 4カ所	建物その他	60百万円

営業用店舗については最小区分である営業店単位(出張所については母店に含めております。)でグルーピングを行っており、遊休資産については各々独立した単位として取り扱っております。また、連結される子会社は各社毎にグルーピングを行っております。

回収可能価額は正味売却価額により測定しております。正味売却価額は、路線価、固定資産税評価額等から処分費用見込額を控除して算定しております。

(連結株主資本等変動計算書関係)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位：千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度 末株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	3,400	-	-	3,400	
合計	3,400	-	-	3,400	
自己株式					
普通株式	8	0	-	8	(注)
合計	8	0	-	8	

(注) 自己株式の増加160株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
2025年6月25日 定時株主総会	普通株式	84百万円	25円	2025年 3月31日	2025年 6月26日
2025年11月12日 取締役会	普通株式	84百万円	25円	2025年 9月30日	2025年 12月10日
合計		169百万円			

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の 総額	配当の原資	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
2026年6月24日 定時株主総会	普通株式	118百万円	利益剰余金	35円	2026年 3月31日	2026年 6月25日

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当行グループは、預金や貸出業務及び有価証券投資等の銀行業務を中心に行っております。これらの事業を行うため、個人や法人等からの預金による資金調達を行っております。また、資金運用として、中小企業や個人向けの貸出業務や国債を中心とした有価証券投資を行っております。業務の特性上、資産及び負債の大部分を金融資産、金融負債が占めており、金利変動等による影響を適切に把握し管理するため、資産及び負債の総合的管理（ALM）を行っております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当行グループが保有する金融資産は、主として貸出金及び有価証券であります。貸出金は、県内の中小企業及び個人に対するものが主であり、顧客の債務不履行によってもたらされる信用リスクに晒されております。

有価証券は、国債を中心に、債券、株式、投資信託を保有しております。これらは、それぞれ発行体の信用リスク、金利の変動リスク及び市場価格の変動リスクに晒されております。

金融負債は、個人や法人等からの預金であり、7割程度を要求払預金が占めており、顧客への払戻しに対する流動性リスクや金利変動リスクに晒されております。

また、外貨建の金融資産及び金融負債について、為替相場が変動することにより価値が変動する為替リスクに晒されております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

① 信用リスクの管理

当行グループは、信用リスク管理規程に基づき、貸出金について、個別案件ごとの与信審査、与信限度額、信用情報管理、内部信用格付、保証や担保の設定、問題債権への対応など、与信管理に関する体制を整備しております。これらの与信管理は、各営業店、融資統括部、営業統括部及びリスク統括部により行われ、また、定期的に経営陣による融資決定審議会や常務会・取締役会等を開催し、審議や報告を行っております。さらに、与信管理の状況については、リスク統括部へ定期的に報告するとともに、監査部がチェックしております。

有価証券の発行体の信用リスクに関しては、営業統括部において、信用情報や時価の把握を定期的に行い管理しております。

② 市場リスクの管理

(i) 金利リスクの管理

当行グループは、統合的リスク管理規程及び要領において、金利リスク量の計測、分析・検証等を行うことを明記し、金利の変動リスクを管理しております。総合企画部は、ギャップ分析や金利感応度分析等を行い、資産・負債の金利や期間を総合的に把握しており、定期的にリスク統括委員会や常務会等への報告を行っております。

なお、金利の変動リスクをヘッジするためのデリバティブ取引は行っておりません。

(ii) 価格変動リスクの管理

当行グループは、市場関連リスク及び流動性リスク管理規程に基づき、有価証券の価格変動リスクを管理しております。毎期、有価証券ポートフォリオのリスクリミット（リスク量の限度額）、損失限度枠（評価損の限度額）を設定しており、定期的にバリュー・アット・リスク（VaR）によるリスク量計測や評価損益を把握し、遵守状況を管理しております。これらの管理状況は、営業統括部よりALM委員会へ定期的に報告が行われております。

(iii) 為替リスクの管理

当行グループは、為替の変動リスクに晒されている金融負債（顧客による外貨建預

金等) に対し、その反対取引として、金融資産である国内金融機関に対する外貨建短期貸付(コールローン)等を行うことで当該リスクを軽減しております。外貨建資産及び外貨建負債のバランスを日次管理することにより、為替リスクを管理しております。

(iv) 市場リスクに係る定量的情報

(ア) トレーディング目的の金融商品

当行グループは、トレーディング目的の金融商品は保有していません。

(イ) トレーディング目的以外の金融商品

当行グループは、バリュー・アット・リスク (VaR) により市場リスクの計測を行っており、資産・負債に係る金利リスクの定量的分析及び有価証券に係る価格変動リスクの定量的分析を行っております。

資産・負債に係る金利リスクの定量的分析については、対象とする金融商品を貸出金、預け金、コールローン、預金等とし、分散共分散法(保有期間1年、信頼区間99%、観測期間5年)により行っております。

2026年3月31日現在における当行グループの資産・負債に係るリスク量は3,065百万円であります。

有価証券の価格変動リスクの定量的分析については、対象とする金融商品を時価評価の対象となっている有価証券とし、金利、株価、為替の各リスク変数について相関を考慮した上、分散共分散法(保有期間6ヶ月、信頼区間99%、観測期間5年)により行っております。

2026年3月31日現在における当行グループの有価証券に係るリスク量は3,645百万円であります。資産・負債に係るリスク量及び有価証券に係るリスク量について、当行では、モデルが算出するVaRと、VaR計測時のポートフォリオに基づく損益とを比較するバックテストングを実施しております。2025年度に関して実施したバックテストングの結果、損失がVaRを複数回超過したため、VaRに一定の乗数を乗じることで、保守性を確保しております。

ただし、VaRは過去の相場変動をベースに統計的に算出した一定の発生確率で市場リスク量を計測しており、通常では考えられないほど市場環境が激変する状況下におけるリスクは捕捉できない可能性があります。

③ 資金調達に係る流動性リスクの管理

当行グループは、預金による資金調達を行っており、流動性準備等に基づく資金繰り逼迫度区分による流動性リスク管理を行っております。日次ベースで資金繰り逼迫度区分を把握し、区分に応じた資金繰り管理を実施しております。また万一の場合に備えて流動性危機管理マニュアルを制定し、緊急時における体制を整備しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

2026年3月31日における連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、市場価格のない株式等及び組合出資金は、次表には含めておりません(注1)参照)。また、現金預け金は、短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似することから、注記を省略しております。

(単位：百万円)

	連結貸借対照表 計上額	時 価	差 額
(1) 有価証券	107,704	107,704	-
その他有価証券	107,704	107,704	-
(2) 貸出金	582,372		
貸倒引当金 (*)	△3,464		
	578,908	577,198	△1,709
資産計	686,612	684,902	△1,709
(1) 預金	767,346	767,102	△244
負債計	767,346	767,102	△244

(*) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

(注1) 市場価格のない株式等及び組合出資金の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「その他有価証券」には含まれておりません。

(単位：百万円)

区 分	連結貸借対照表計上額
非上場株式 (* 1) (* 2)	1,915
組合出資金 (* 3)	115

(* 1) 非上場株式については、「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号 2020年3月31日) 第5項に基づき、時価開示の対象とはしておりません。

(* 2) 当連結会計年度において、非上場株式について減損処理はありません。

(* 3) 組合出資金については、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 2021年6月17日) 第24-16項に基づき、時価開示の対象とはしておりません。

(注2) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
有価証券						
その他有価証券のうち 満期があるもの	20,930	32,844	11,054	8,146	7,544	17,378
貸出金 (*)	111,257	94,880	77,014	51,737	58,159	180,588
合 計	132,187	127,725	88,069	59,883	65,703	197,967

(*) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない8,734百万円は含めておりません。

(注3) 社債、借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*)	731,603	19,457	16,286	-	-	-
合計	731,603	19,457	16,286	-	-	-

(*) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産または負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品

当連結会計年度(2026年3月31日)

(単位：百万円)

	時価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
その他有価証券				
国債・地方債等	39,934	33,383	-	73,318
社債	-	24,580	-	24,580
株式	4,387	-	-	4,387
その他	5,418	-	-	5,418
資産計	49,740	57,964	-	107,704

(2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品

当連結会計年度 (2026年3月31日)

(単位：百万円)

	時価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
貸出金	-	-	577,198	577,198
資産計	-	-	577,198	577,198
預金	-	767,102	-	767,102
負債計	-	767,102	-	767,102

(注1) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

資 産

有価証券

有価証券については、活発な市場における無調整の相場価格を利用できるものはレベル1の時価に分類しております。主に上場株式や国債がこれに含まれます。

公表された相場価格を用いていたとして市場が活発でない場合にはレベル2の時価に分類しております。主に地方債、社債がこれに含まれます。

貸出金

貸出金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が実行後大きく異なっていない限り、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。固定金利によるものは、貸出金の種類及び期間、与信管理上の信用リスク区分ごとに、信用リスクを反映させて将来キャッシュ・フローを見積もり、無リスク金利で割り引いて時価を算定しております。なお、約定期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、見積将来キャッシュ・フローの現在価値又は担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けていないものについては、返済見込み期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。これらについてはレベル3の時価に分類しております。

負債

預金

要求払預金については、連結決算日に要求に応じて直ちに支払うものは、その金額を時価としております。また、定期預金については、一定の期間ごとに区分して、将来キャッシュ・フローを割引いた割引現在価値により時価を算定しております。割引率は、新規に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。なお、預入期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。これらについてはレベル2の時価に分類しております。

(賃貸等不動産関係)

賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいため、注記を省略しております。

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を分解した情報

(単位：百万円)

	当連結会計年度
経常収益	16,009
うち役務取引等収益	1,637
預金・貸出業務	787
為替業務	423
証券関連業務	94
代理業務	77
その他	255

(注) 上表には企業会計基準第10号「金融商品に関する会計基準」に基づく収益も含んでおります。

(1株当たり情報)

1株当たりの純資産額 12,772円52銭
1株当たりの親会社株主に帰属する当期純利益金額 502円36銭

独立監査人の監査報告書

2026年5月22日

株式会社 沖縄海邦銀行
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員 公認会計士 川 口 輝 朗
業務執行社員
指定有限責任社員 公認会計士 前 野 信 哉
業務執行社員

監査意見

当監査法人は、会社法第436条第2項第1号の規定に基づき、株式会社沖縄海邦銀行の2025年4月1日から2026年3月31日までの第79期事業年度の計算書類、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書及び個別注記表並びにその附属明細書（以下「計算書類等」という。）について監査を行った。

当監査法人は、上記の計算書類等が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、当該計算書類等に係る期間の財産及び損益の状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「計算書類等の監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定（社会的影響度の高い事業体の財務諸表監査に適用される規定を含む。）に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

その他の記載内容

その他の記載内容は、事業報告及びその附属明細書である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の計算書類等に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

計算書類等の監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と計算書類等又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

計算書類等に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して計算書類等を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な

虚偽表示のない計算書類等を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

計算書類等を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき計算書類等を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

計算書類等の監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての計算書類等に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から計算書類等に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、計算書類等の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 計算書類等の監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として計算書類等を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において計算書類等の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する計算書類等の注記事項が適切でない場合は、計算書類等に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 計算書類等の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた計算書類等の表示、構成及び内容、並びに計算書類等が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

連結計算書類に係る会計監査人の監査報告書

独立監査人の監査報告書

2026年5月22日

株式会社 沖縄海邦銀行
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員 公認会計士 川 口 輝 朗
業務執行社員
指定有限責任社員 公認会計士 前 野 信 哉
業務執行社員

監査意見

当監査法人は、会社法第444条第4項の規定に基づき、株式会社沖縄海邦銀行の2025年4月1日から2026年3月31日までの連結会計年度の連結計算書類、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結株主資本等変動計算書及び連結注記表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社沖縄海邦銀行及び連結子会社からなる企業集団の当該連結計算書類に係る期間の財産及び損益の状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結計算書類の監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定（社会的影響度の高い事業体の財務諸表監査に適用される規定を含む。）に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

その他の記載内容

その他の記載内容は、事業報告及びその附属明細書である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結計算書類に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結計算書類の監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結計算書類又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

連結計算書類に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結計算書類を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結計算書類を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内

部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結計算書類を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結計算書類を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結計算書類の監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結計算書類に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結計算書類に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結計算書類の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結計算書類の監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結計算書類を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結計算書類の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結計算書類の注記事項が適切でない場合は、連結計算書類に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結計算書類の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結計算書類の表示、構成及び内容、並びに連結計算書類が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結計算書類に対する意見表明の基礎となる、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手するために、連結計算書類の監査を計画し実施する。監査人は、連結計算書類の監査に関する指揮、監督及び査閲に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。
- ・ 監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。
- ・ 監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

監査役会の監査報告書

監 査 報 告 書

当監査役会は、2025年4月1日から2026年3月31日までの第79期事業年度における取締役の職務の執行に関して、各監査役が作成した監査報告書に基づき、審議の上、本監査報告書を作成し、以下のとおり報告いたします。

1. 監査役及び監査役会の監査の方法及びその内容

- (1) 監査役会は、監査の方針、職務の分担等を定め、各監査役から監査の実施状況及び結果について報告を受け、必要に応じて説明を求めました。
- (2) 各監査役は、監査役会が定めた監査役監査の基準に準拠し、監査の方針、職務の分担等に従い、取締役、内部監査部門その他の使用人等と意思疎通を図り、情報の収集及び監査の環境の整備に努めるとともに、以下の方法で監査を実施いたしました。
 - ① 取締役会その他重要な会議に出席し、取締役及び使用人等からその職務の執行状況について報告を受け、必要に応じて説明を求め、重要な決裁書類等を閲覧し、本部及び主要な営業店において業務及び財産の状況を調査いたしました。また、子会社については、子会社の取締役及び監査役等と意思疎通及び情報の交換を図り、必要に応じて子会社からの事業の報告を受けました。
 - ② 事業報告に記載されている取締役の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制その他株式会社及びその子会社から成る企業集団の業務の適正を確保するために必要なものとして会社法施行規則第100条第1項及び第3項に定める体制の整備に関する取締役会決議の内容及び当該決議に基づき整備されている体制（内部統制システム）について、取締役及び使用人等からその構築及び運用の状況について定期的に報告を受け、必要に応じて説明を求め、意見を表明いたしました。
 - ③ 会計監査人が独立の立場を保持し、かつ、適正な監査を実施しているかを監視及び検証するとともに、会計監査人からその職務の執行状況について報告を受け、必要に応じて説明を求めました。また、会計監査人から「職務の遂行が適正に行われることを確保するための体制」（会社計算規則第131条各号に掲げる事項）を「監査に関する品質管理基準」（企業会計審議会）等に従って整備している旨の通知を受け、必要に応じて説明を求めました。

以上の方法に基づき、当該事業年度に係る事業報告及びその附属明細書、計算書類（貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書及び個別注記表）及びその附属明細書並びに連結計算書類（連結貸借対照表、連結損益計算書、連結株主資本等変動計算書及び連結注記表）について検討いたしました。

2. 監査の結果

- (1) 事業報告等の監査結果
 - ① 事業報告及びその附属明細書は、法令及び定款に従い、会社の状況を正しく示しているものと認めます。
 - ② 取締役の職務の執行に関する不正の行為又は法令若しくは定款に違反する重大な事実はありません。
 - ③ 内部統制システムに関する取締役会決議の内容は相当であると認めます。また、当該内部統制システムに関する事業報告の記載内容及び取締役の職務の執行についても、指摘すべき事項はありません。
- (2) 計算書類及びその附属明細書の監査結果
会計監査人EY新日本有限責任監査法人の監査の方法及び結果は相当であると認めます。
- (3) 連結計算書類の監査結果
会計監査人EY新日本有限責任監査法人の監査の方法及び結果は相当であると認めます。

2026年5月25日

株式会社 沖縄海邦銀行 監査役会

常勤監査役	外 間	政 康	㊟
社外監査役	金 沢	信 昭	㊟
社外監査役	横 田	哲	㊟

以 上

株主総会参考書類

議案および参考事項

第1号議案 剰余金の処分の件

剰余金の処分につきましては、以下のとおりといたしたいと存じます。

期末配当に関する事項

当期の期末配当につきましては、長期的、安定的な配当の継続を基本方針としております。

(1) 株主に対する配当財産の割当てに関する事項およびその総額

当行普通株式1株につき金 35円

総額 118,689,445円

(注) 中間配当を含めると、年間の配当金は、1株につき60円となります。

(2) 剰余金の配当が効力を生ずる日

2026年6月25日

第2号議案 取締役7名選任の件

取締役全員（8名）は、本総会終結の時をもって任期満了となります。

つきましては、取締役構成数を減員し、取締役7名の選任をお願いしたいと存じます。

取締役候補者は次のとおりであります。

候補者番号	氏名 (生年月日)	略歴、地位、担当および重要な兼職の状況	候補者の有する当行株式の種類および数
1	しんじょう かずふみ 新城 一史 1963年12月16日生	1990年12月 当行入行 2016年6月 審査部長 2017年6月 執行役員審査部長 2018年6月 取締役企業支援部長 2018年7月 取締役ソリューション営業部長 2019年6月 取締役総合企画部長 2020年6月 常務取締役総合企画部長 2021年4月 常務取締役 2021年6月 代表取締役頭取 現在に至る	普通株式 2,000株
2	さきはら まさき 崎原 正樹 1965年4月27日生	1989年4月 当行入行 2016年6月 リスク管理部長 2017年6月 執行役員企業支援部長 2018年6月 取締役営業統括部長 2019年6月 取締役審査部長 2020年6月 取締役事務統括部長 2022年4月 常務取締役 2024年4月 代表取締役専務 現在に至る	普通株式 1,500株
3	ひらかわ まもる 平川 衛 1967年11月2日生	1986年4月 当行入行 2018年6月 本店営業部長 2019年6月 執行役員本店営業部長 2021年4月 執行役員融資統括部長 2022年6月 取締役融資統括部長 2023年6月 取締役 2024年4月 常務取締役 現在に至る	普通株式 900株
4	おなが まこと 翁長 誠 1969年9月16日生	1994年4月 当行入行 2021年4月 本店営業部長 兼 辻町支店長 2023年6月 執行役員本店営業部長 兼 松尾支店長 兼 辻町支店長 2024年4月 執行役員営業統括部長 2025年4月 常務執行役員 2025年6月 常務取締役 現在に至る	普通株式 1,000株

候補者番号	氏名 (生年月日)	略歴、地位、担当および重要な兼職の状況	候補者の有する当行株式の種類および数
5	おと しんじ 小 渡 晋 治 1982年9月30日生	2005年4月 メリルリンチ日本証券株式会社（投資銀行部門）入社 2016年12月 Singapore Management University, LKCSB, MBA取得 2017年4月 株式会社okicom 入社 2018年4月 独立行政法人中小企業基盤整備機構 中小企業アドバイザー（現職） 2019年1月 琉球びんがな普及伝承コンソーシアム 事務局長（現職） 2021年3月 株式会社BAGASSE UPCYCLE 共同創業者／代表取締役CEO（現職） 2021年3月 株式会社RP取締役（現職） 2021年9月 Curelabo株式会社 取締役CSO（現職） 2022年12月 国立大学法人琉球大学国際地域創造学部 非常勤講師 2023年5月 株式会社okicom 取締役副社長（現職） 2024年6月 当行非常勤取締役（現職） 現在に至る 重要な兼職の状況 株式会社okicom取締役副社長	0株
6	しまぶくろ ななこ 島 袋 菜々子 1982年8月13日生	2005年4月 専門学校那覇日経ビジネス入社 2016年8月 株式会社金秀本社（現：金秀ホールディングス株式会社）入社 2019年6月 日経教育グループ株式会社 取締役（現職） 2019年10月 株式会社HRD labo OKINAWA 取締役 2020年4月 同社取締役部長 2022年6月 株式会社日経エスブリッジ取締役（現職） 2025年4月 株式会社HRD labo OKINAWA 専務取締役（現職） 2025年6月 当行非常勤取締役（現職） 現在に至る 重要な兼職の状況 株式会社HRD labo OKINAWA専務取締役	0株
7	* しんがき よしき 新 垣 嘉 樹 1962年9月7日生	1987年4月 沖縄開発庁 沖縄総合事務局 財務部財務課 入庁 2007年7月 金融庁 監督局 証券課課長補佐 2021年7月 財務省 東海財務局 岐阜財務事務所長 2023年7月 三甲株式会社 顧問（現職） 2023年8月 朝日大学 客員教授（現職） 現在に至る 重要な兼職の状況 朝日大学 客員教授	0株

- (注) 1. *は新任の取締役候補者であります。
2. 各取締役候補者と当行との間には、特別の利害関係はありません。
3. 小渡晋治氏、島袋菜々子氏および新垣嘉樹氏は社外取締役候補者であります。
4. 社外取締役候補者の選任理由について
小渡晋治氏につきましては、会社役員の実験のほか、金融・IT面にも精通しており、その知見を活かすことにより、当行取締役会の活性化に繋がるものと期待できることから、引き続き社外取締役として選任をお願いするものです。
島袋菜々子氏につきましては、人材開発や組織開発の実験が豊富であり、女性活躍推進にも積極的に携わっており、その知見を活かすことにより、当行取締役会の活性化に繋がるものと期待できることから、引き続き社外取締役として選任をお願いするものです。
新垣嘉樹氏につきましては、沖縄総合事務局や金融庁等で勤務していた際、金融行政や金融機関の監督業務などに従事し、重要な役割を担っていた経験があり、リスク管理部門の強化に繋がるものと期待できることから、社外取締役として選任をお願いするものです。
5. 候補者小渡晋治氏の当行社外取締役就任期間は、本総会終結の時をもって2年となります。また、島袋菜々子氏の当行社外取締役就任期間は、本総会終結の時をもって1年であります。
6. 当行は、社外取締役候補者である小渡晋治氏および島袋菜々子氏の再任が承認された場合、期待された役割を十分に発揮できるよう各氏と責任限定契約を継続する予定であります。
また、新任社外取締役候補者の新垣嘉樹氏の選任が承認された場合は、同氏との間で同様の契約を締結する予定であります。
なお、責任限定契約の概要は次のとおりであります。
・会社法第427条第1項の規定に基づき、その職務を行うにあたり善意にして重大な過失がないときは同法第425条第1項で規定する最低責任限度額をもって損害賠償責任額とする。
7. 当行は、会社法第430条の3第1項に規定する役員等賠償責任保険契約を保険会社との間で締結し、被保険者が会社の役員としての業務につき行った行為（不作為を含む）に起因して損害賠償請求がなされたことにより被保険者が被る損害賠償金や争訟費用等を補償することとしております。
ただし、贈収賄などの犯罪行為や意図的に違法行為を行った役員自身の損害等は補償対象外とすることにより、役員等の職務の執行の適正性が損なわれないように措置を講じております。保険料は全額当行が負担しております。
各候補者は、当該保険契約の被保険者に含まれることとなります。
8. 現在当行の取締役である各候補者の当行における地位および担当は、事業報告「2.(1)会社役員の実況」に記載のとおりであります。

第3号議案 補欠監査役2名選任の件

本総会終結の時から次期定時株主総会開始の時までの間に、法令に定める監査役の員数を欠くことになる場合に備え、あらかじめ補欠監査役2名の選任をお願いいたしたいと存じます。

補欠監査役の候補者は、監査役外間政康の補欠として金城安雄氏を、また社外監査役 金沢信昭氏および横田哲氏の補欠の社外監査役として国吉大陸氏をご選任いただくことをお願いいたしたいと存じます。

なお、その選任の効力は就任前に限り、監査役会の同意を得て、取締役会の決議によりその選任を取り消すことができるものとさせていただきます。

また、本議案に関しましては、監査役会の同意を得ております。

補欠監査役の候補者は次のとおりであります。

候補者番号	氏名 (生年月日)	略歴、地位および 重要な兼職の状況	候補者の 有する当行 株式の種類 および数
1	<small>きんじょう やすお</small> 金城 安雄 1967年7月15日生	1990年4月 当行入行 2022年4月 営業統括部長 2024年3月 執行役員営業統括部長 2024年4月 執行役員監査部長 2024年7月 人事総務部付外向（執行役員） 2024年10月 執行役員取引先経営改善特命担当 2025年4月 執行役員監査部長 2026年4月 常務執行役員監査部長 現在に至る	0株
2	<small>くによし たいりく</small> 国吉 大陸 1992年9月16日生	2015年4月 EY新日本有限責任監査法人入所 2017年7月 税理士法人・社会保険労務士法人タックス・アイズ入所 2020年1月 国吉浩隆税理士事務所入所 2021年1月 国吉大陸公認会計士・税理士事務所 開業（現職） 現在に至る 重要な兼職の状況 国吉大陸公認会計士・税理士事務所 所長 公認会計士・税理士	0株

(注) 1. 補欠監査役候補者と当行との間には、特別の利害関係はありません。

2. 国吉大陸氏は補欠の社外監査役候補者であります。

3. 補欠の社外監査役候補者の選任理由について

国吉大陸氏につきましては、公認会計士・税理士として財務および会計に関する専門的な知見を有しており、地元企業の経営者としての視点を持ち合わせていることから、当行の監査においてもその職務を適切に遂行していただけると判断したため、補欠の社外監査役として選任をお願いするものです。

4. 当行は国吉大陸氏が社外監査役に就任された場合、期待された役割を十分に発揮できるよう同氏と責任限定契約を締結する予定であります。なお、その契約内容の概要は次のとおりであります。
 - ・ 社外監査役が任務を怠ったことによって損害賠償責任を負う場合は会社法第425条第1項各号で規定する最低責任限度額をもって損害賠償責任額とする。
5. 当行は会社法第430条の3第1項に規定する役員等賠償責任保険契約を保険会社との間で締結し、被保険者が会社の役員としての業務につき行った行為（不作為を含む）に起因して損害賠償請求がなされたことにより被保険者が被る損害賠償金や争訟費用等を補償することとしております。

ただし、贈収賄などの犯罪行為や意図的に違法行為を行った役員自身の損害等は補償対象外とすることにより、役員等の職務の執行の適正性が損なわれないように措置を講じております。保険料は全額当行が負担しております。

各候補者が監査役に就任した場合、当該保険契約の被保険者に含まれることとなります。

第4号議案 退任取締役に対し退職慰労金贈呈の件

本総会の終結の時をもって退任される取締役 上地知朗氏、西里喜明氏に対し、在任中の労に報いるため当行所定の基準に従い、相当額の範囲内で退職慰労金を贈呈いたしたいと存じます。その具体的金額、贈呈の時期、方法等は、取締役会にご一任願いたいと存じます。

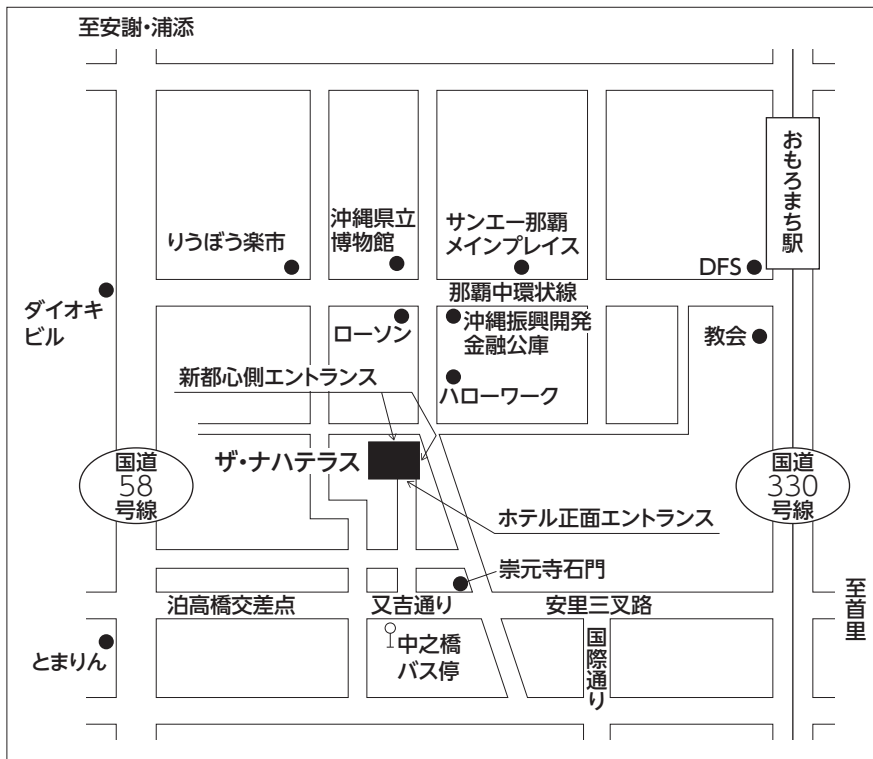
なお、退任取締役に対する退職慰労金は当行取締役会が決定した取締役の報酬等の決定方針に沿って当行の定める一定基準内とするものであり、その内容は相当であると判断しております。退任取締役の略歴は次のとおりであります。

氏名	略歴
うえち ともあき 上地 知朗	2024年6月 当行常務取締役 現在に至る
にしぎと よしあき 西里 喜明	2021年6月 当行取締役（社外） 現在に至る

以上

株主総会会場ご案内図

会場 那覇市おもろまち2丁目14番1号
ザ・ナハテラス 3階 宴会場アダン
電話 098-864-1111



交通：モノレールおもろまち駅より徒歩15分
中之橋バス停より徒歩8分

駐車場の収容台数に限りがございますので、公共交通機関をご利用ください
ますようお願い申し上げます。